松浦玉圃書簡

大槻文彦宛 自筆

洋学文庫
文庫8
A330

43-7210(8)

大正七年八月

松浦 王国 八十歳 神田小川町 時計商

富士登山之記

拝啓殊暑甚敷〻雨とては小しも
無之只大国難の暴動是は先生新
聞紙上にて御承知と存じ候石申上此度
は先生別天地故従て御気楽にして御一
身の御健康上亟極御百〻実に御
羨〻尚此上とも御健全祈奉
り候
陳て老生も御蔭様を以て健全にて

43-7210(8)

浩動罷在る間市中を巡り度
旨過日一寸申上げ置き富士登山出発
始め三日の朝六時飯田町より汽車にて
出發吉田口より登り夜の十一時三合目
に着出発前に一伯午前二時出發此日迄来
になるまで好天氣なりとの事四合目の上此所
は日蓮上人が朝日を拝せられ選まれ
たる所ありと云ふ場所にて朝日市来

迎と云ふ故拝す是は実に筆舌
に尽くしがたく八十里を少て如斯き幸ひを
得ると云ふは是即ち天佑と云ふの外
無之六合目に至り和山下山の其混雑
驚くの外なし老生の同行は婿を始
めとして十五人の孫和に仙蓮の物是は
幸ひと山梅自に奉職なれは強力以上
の山男故大に参利を得和に召便の方

女其外友人山田知晃氏六人の同警此
所にて体々紙袋の健康剤を壱本つゝ
を内服せしめ終るに外の同者共ゞの赤き薬と
心意質問者有之例の通り説明をなし
し居る大病人を壱人般ひ居るは八千家
の死亡の一代の大功其顛末は十五人組の
同者此六合目に着の時間午前三時と
云ふ其同者中壱人激烈なる腹痛

甚だしく医者の手当ては元より無之
吉田に下山の外に作なきも強力三四人ふ
らてはて下山六ケ敷無拠強力を壱人
看護人として残し置き壱人は死と山して
頂上より強力二人共下山せしめて三人の
強力にて吉田の医者の所迄送る事に一決
せしとの事尤山中にて如何程賃金を
拂ふても強力壱人雇ふ事も不可能

特事故強力二人の下山を待のみとなる
看護の強力ご紅の特効あるを聞き、
病人に飲ませたる故是非救ひ呉との懇
願ありしかれは早速見るに激烈なる胃痙
攣半一時間を争ふ危険症なれは紅
液壱本水を入れて九倍として内服せ
ば忽ち吐くとなる事を説明して服用
なさしめしに三分間にして障害の危験

物を海山に吐反し多量其奏効の神速
なるかは居合せる同者共は大に其効
に驚きし病人は又忽ち元氣快復せられたる
故若の如くなるとて大に喜び強力の看
護も殊に喜び此大病人の若しも此事
のありしかは如何はせんと非常なる苦心と
の話さもあるべし外に紅液壱本をのまし
是にて一体みして山せるべしと二本の

紙幅無代價にて激症の胃症鍼灸を富士
の山中に於て病者を救ふと云ふは八十
歳にして紙の熱狂的の賜物にして此
度の旅と山は老生一代の名譽自ら詩
るの愉快さよ實にかつちよく山田氏
の如きは紙鹽流の神速効驗あるを始
めて目擊せられ大に會得す老生能
慈善實に國家の爲めを大に感じ

られた
是は此度の事に必用あらざれ共老人の
癖著を思ひ起す事は御承知の佐和君
の妻君他に御紹介に招かれ居宅後非常
の腹痛妻君も母上も紙鹽の佐和君除く
の外熱心なれと雲置き居れ為めから
ヒヒを洗ふて天日のせ〻に十分御位にして吐
きを散効驗を知らざる佐和君の吐き

ゆゝしとして親族の医師
昔ごの治療を施されたれ先以て医師の得
意の注射等の療法の為め心臓麻痺
を起す一中夜にして落命せられだ紅潮
の分量ふ見の為めに病の障害危険
物を吐きく出しの力ふく其時は又々のはあ
なのは元気快復せらるゝものを医療
の為め不幸を見るのかなしめし是等は

誰れ人にても記憶せられたは人だとには
無之と思考の位に寸申上れ
右は実験談なれども体験に話の内に
知られ八合目に至る迄所にて休み
持参の食物山中にて大に幸ひを得た
り同者の紙より実に驚く程熟るに
身かるの強力二人下山し来る余が雇
ひ入る強力は仲間中の親方にて

友人に向へなんの為めに下山せられしや
友人曰く六合目に大病人あり其且
那を二人にて下山せしめ吉田の医者迄
送るのであると云の事に付其の病人は
是なる牛の背老人様の霊薬を飲
惠み与れ全治して今に元気に来らん
なれば老人六合目迄行き来へして且
那に力を添へ和と山せしむべし老人は

弱りて歩老人様の後押をせしとの威
權是に従へ老人は六合目にて下山老人は
我れ等と同行の事ふ決着老人の為
めには實に幸ひを得病者老人を救
ひたるが勿ち仁道の車孫に廻りの早き
事是全く善事を神が惠みたるも
ので九合目より絶復迄は最険阻な
山の途中強力を雇ひたくとも金銭

を得らるるものあるべし実に善事は
積むべきてあるを曾や男孫等に傳
大なる教訓と為べし此度の八十の老山は
大切を著す然るに六合目の病人元氣よ
くなり来り九合目に於て余等体外中
命の親として大に恵ひ是にて分れ余又老人の
味方強力を得るあるあるちよく絶頂に
達し富士山神を拜し時に午前十一時

四十五分也
早速余が行衣等に印章を受け頂
上より見物なせしに大に人目を引きた
るは此山の仕度白衣に紐の巻り紐
かの古代帯脊に巻大に富士登山八十
翁と大書して白の後ろ鉢巻金剛
杖とふ低俗白衣の脊は一合目よりの
朱印べたべと押たるは大に人目を引

き孫に此日は迎年にかなく穏かなる天
気行合人々雑彼とかく余に向へ相目出
とう〳〵とかふ幾百の人々が祝詞呉れ
寶田老生の一代の名誉自ら誇る愉
快さよ是全く紅酸の賜物實に幸ひ
を得て相応に成下度
富士越一の龍成氣とりて筆先の
八十孫紀念ふ為んた勢ひ

今年吉田口より八十歳の老山者は老
人も多きとかふ
絶頂のレコートやふ新八十老山
おかさらき給ふきくや姫の君
頂上に三時間余見物して午後三時に
須走りを辰の刻くとかふは六の事
なるんの
富士下山さくやの姫の恵みまて

すばらしき五月晴れんた八千の勢ひ
須賀より驛着は午後十一時十分翌朝
八時出發馬車にて御殿場に至る早
々汽車にて沼津仕ル
扨先生御出發に付種々勝手なる事
の外形上無慶御遥拝恐落と
あり年々御用捨と成り慶に過日は御
念入の御書かき頂戴御示御厚の志

と御諭の御礼申上る埋木彫刻
事に付ては先生の御勸誘付て
山田市長迫が賛成とのこと是一重
に先生の厚き御配慮にて埋木に
花とは全く出来事に御座候御礼
早速この申上る処無學の老婆覚束
ふくも老生の仰付毎度ご辯書御
笑迫多礼は御先方に慶先は富士の

顧ミル千歳ニテ如ク為ス所ナシ
今度畢ク物ニテ九拜

大正七年八月

本郷三尾八十家

玉園

大槻文彦先生

玉園

二伸何れ其内御伺ひ上新々御
礼御挨拶旁上京致ス

神田神保町通り宮田製

XII
12